

---

# 複雑な人達

黒木猫人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

複雑な人達

### 【Nコード】

N7933G

### 【作者名】

黒木猫人

### 【あらすじ】

クラスメイトの三奈木桜子が今日も恋に突っ走っている。あつ、コラ！少しは冷静に回りを見なさいって……駄目だこりゃ。

その人と出会って、私　三奈木桜子は運命というものを信じた  
くなつた。

「ねえ、その君」

「はい？」

振り向いた先にいたその人は、思わず息を飲んでしまう程、綺麗  
な顔立ちで。

制服から、同じ高校の生徒なのだと分かった。まるで水晶のよう  
に澄んだ瞳と、ウェーブの掛かった栗色の髪が、私の視線の自由を  
奪う。

「これ落としたでしょ？　ハンカチ」

一言一句を紡ぐ度に動く唇が、心の動揺を促す。

「えっと君……聞いてる？」

これはあれだ。

「おい、君ってば」

間違いない。

「生きてますか？」

ズバリ恋ってやつですよ!!!

「駄目だこりゃ」

そんな朝の通学路での出来事である。

「　　ってわけなの、蓮ちゃん!!!」

今朝の回想を上演し終えた私は、教室の机の上にお弁当を広げて  
いるクラスメイトに向き直った。

「はあ」

「本当に格好良かったんだよ？ 蓮ちゃんも見たら惚れちゃうよ、絶対！」

蓮ちゃんは「へえ、そうなの」と気のない返事。

私は、ばんつと机を叩く。お弁当箱が軽く飛び跳ねた。

「幼馴染みが恋の相談をしてるのに、何を呑気にランチタイム！？ ていうか、その卵焼き美味しそう！」

「いや、だって今お昼休みだし。他にいつ食べるって言うわけ？」

「授業中に教科書の影に隠しながら！」

「早弁ならぬ遅弁ですか」

勘弁して下さいよ、という顔をする蓮ちゃん。

だが今は、そんな悠長に構えている暇はないのである。空腹など、今私が直面している問題に比べれば、ゾウの足元のアリの過ぎない。ちなみに私は遅弁する予定だ。

「いい、蓮ちゃん？ 既に私は、その人について色々調べてあるの。名前は水瀬優希先輩。二年生で、陸上部のエース。百メートル走でインターハイにも出場したことがあるんだって！」

「ああ、あの有名な。なかなか人気あるらしいね」

「なっ、駄目だからね蓮ちゃん！？ 横取りなんて絶対に！」

「さ、桜子、目が血走ってるよ目が。それと顔近い！」

私は蓮ちゃんから顔を離すと、ぐっと前で握り拳を作った。

「とにかく、ここからが本題！ ズバリ今日」

その場で三回転。私は蓮ちゃんに、びしっと人差し指を向けた。

「私は水瀬先輩に告白しようと思うのです！！！」

「展開早いな、オイ」

「早くないよ。むしろ遅いくらい！」

調べによると、水瀬先輩の人気は校内でも五本指に入る程。ライバルは非常に多い。

だから、行動は早ければ早い方がいいのだ。早過ぎるなんてことはありはしない。

バトルはリアルタイムで進行中なのである。

「まあ、それは分かったけどさ……そこまで自分で決めてるなら、何でわざわざ他人に相談する必要があるわけ？」

「だってえ……」

私だつて一応、乙女だし。

「やっぱり告白はそれなり恥ずかしいというかあ、誰かに背中を押して欲しい気分？」

「また何とも半端な行動力ですな……ていうかさ。そもそも告白どこのころの以前にね……」

蓮ちゃんはまだ腑に落ちなさそうな顔。

「大丈夫！ 私はきつとこのバトルに勝つよ！ 蓮ちゃんから勇気も貰ったし！」

胸を叩いてみせる。

「いや、だからさ……」

「打倒水瀬先輩……！」

私は決意を胸に秘め、勢い良く拳を振り上げたのだった。

「駄目だこりゃ」

放課後、水瀬先輩の部活が終わる時間を見計い、私は校門の所で待っていた。

先輩は私の姿を見つけると、

「あれ？ 君は確か今朝の……」

「三奈木桜子です！ 今朝はハンカチを拾って頂き、どうもありがとうございました！」

頭を下げる。水瀬先輩は手を横に振った。

「いやいや、そんなことで頭なんか下げなくてもいいよ。困った時はお互い様だから」

照れた笑顔を浮かべる水瀬先輩。

胸の鼓動が次第に高まってゆくのを感じる。

私は、覚悟を決めた。

「水瀬先輩！」

「うん？」

「私と付き合って下さい！！！」

……果たして、賽は投げられた。後は良い目が出るのを祈るのみ……のだが。

水瀬先輩は瞳を瞬かせた。

「……え〜と……ごめん。言っている意味がよく分からないんだけど……」

「私じゃ駄目ですか!？」

「い、いや、君は可愛いと思うよ。そうじゃなくて」

「じゃあ、どうして!？」

一体何がいけないというのか。

水瀬先輩は困ったような顔をして、言った。

「私、女なんだけど……」

翌日。桜子の荒れようときたら酷かった。

「うわあああん、フラれたああ ツ!!!」

当然の結果だろう。世間一般からすれば、同性愛者は少数派である。

桜子は教室の机から顔を上げると、ぐわしと肩を掴んできた。

「蓮ちゃん！ 私の何がいけなかったの!？ 私ってそんなに魅力ない!？」

そもそも前提が間違っている気がするのだが、そんなことは口が裂けても言えない。

がくがくと桜子が体を揺らしてくる。

「女の子として何が足らなかつたの!？ ねえ、教えて蓮ちゃん！」

「!!」

「いや、そんなこと」

「口から深いため息が漏れた。」

「男の俺に言われても……」

本当、コイツにとって何なんだろうね、俺って。

まあ……何だ。

世の中、色々と複雑である。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7933g/>

---

複雑な人達

2010年10月13日14時53分発行